

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00288

研究課題名(和文) 東アジアの一地域としての古代日本における、殯空間での言語表現についての研究

研究課題名(英文) Research on language expression in mourning space in ancient Japan as a region of East Asia

研究代表者

遠藤 耕太郎 (Endo, Kotaro)

共立女子大学・文芸学部・教授

研究者番号：50514113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本古代の葬歌や挽歌は、『魏志倭人伝』に記録された喪葬儀礼の「哭泣」、「歌舞」の中から直接誕生するのではない。そうではなくて、古代中国の喪葬儀礼が周縁地域に波及し、それぞれの地域状況の中で葬送儀礼が形作られるなかで誕生した、言語表現の一つの様式である。本研究はこれを、東アジア地域の喪葬儀礼の具体的な調査を踏まえて明らかにしようとした。その結果、古代中国の『儀礼』に記された諸儀礼が、中国西南部に暮らすモソ人やイ族、リス族をはじめとするいくつかの少数民族の喪葬儀礼に見られることが明らかになった。また、これにかかわる喪葬歌が、それぞれの地域の歌文化のなかで展開している様子も具体的に明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

魏志倭人伝に記されるような古代日本の喪葬儀礼は、日本という地域の中で誕生したのではなく、中国の影響をその周縁に暮らす諸民族が強く受け、それぞれの地域の文化のなかで変容させていったものである。本研究はこういう様相を、日本地域だけではなく、中国西南部に暮らす少数民族の喪葬儀礼の中に捉えようとしたものである。

研究成果の概要(英文)：Ancient Japanese funerary songs and Banka did not emerge directly from the "wailing" and "singing and dancing" of the mourning and funerary rites recorded in the "Wei-Shi-Wa-jin-Den." On the contrary, they are a form of linguistic expression that emerged as ancient Chinese mourning and funerary rites spread to the surrounding regions, and funerary rites took shape in the context of each region. This study attempted to clarify this fact based on a specific survey of mourning and funerary rites in East Asia.

As a result, it became clear that the rituals described in "Yi li" of ancient China were found in the mourning and funerary rites of several ethnic minorities in southwestern China, including the Moso, Yi, and Lisu. It also became clear how the mourning songs related to these rites developed in the song culture of each region.

研究分野：日本古代文学

キーワード：喪葬儀礼 殯 中国少数民族 挽歌 リス族

1. 研究開始当初の背景

日本古代の葬歌や挽歌の成立を考える際、大化の薄葬令以前の喪葬儀礼における殯のあり方や、その空間で唱えられたり歌われたりしたはずの言語表現を明らかにすることが必要になる。しかし、『魏志倭人伝』を始めとして、「哭泣」「歌舞」とは記されるものの、それがどのようなものであったのかはわからない状況であった。また、それが『日本書紀』や『万葉集』とどうかかわるのかについては、ほとんど道筋が見えない状況であり、中国の挽歌の影響を受けて初めて、日本において死に関する歌が始まったという説などがあつた。

2. 研究の目的

本研究は、古代日本(倭)の喪葬儀礼として記された「哭泣」「歌舞」が、『儀礼』や『礼記』に記された古代中国の殯における言語表現の、その周縁地域における地域的変容の一つの形であると考え、このことを東アジアの諸地域に暮らす民族の喪葬儀礼の調査から明らかにしたいと考えた。特に殯における言語表現は、古代中国の儀式書にもその内容が具体的に記されることはなく、むしろ周辺諸民族の喪葬儀礼の中に変容した姿として残っているのである。こうした東アジア的な規模で、その一地域である古代日本の喪葬儀礼にかかわる歌を捉える道筋を探ろうというのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究はまず、古代中国の儀式書などを精読することによって、殯における言語表現のあり方を押さえたうえで、その変容した儀礼や所作、言語表現が周縁に暮らす諸民族の殯儀礼にどのように表われるのかを具体的に調査することとした。ただし、新型コロナウイルスの蔓延という状況の中、中国に向いての調査は断念せざるをえなくなった。そのため、これまで調査されてきた少数民族の喪葬儀礼に関する文献資料、またこれまで私たちが現場で調査した喪葬儀礼の記録、特に1997年、98年に行なったリス族の喪葬儀礼の記録を資料化することとした。資料はテープ起こしから始まり、音声記号、逐語訳、中国語訳、日本語訳を付す形で行なった。

4. 研究成果

その結果、『儀礼』や『礼記』に記された、死の直後に行なわれる「復」という魂呼びの儀礼、殯儀礼における哭やそれに伴う雀踊などの特徴的な歌舞、また、殯において堂上に穴を掘って遺体を一次的に安置する方法、また「尸」という依りましに死者(祖先)を憑依させ祖霊化する方法などが、部分的にはあるが、かなり広く中国西南少数民族の喪葬儀礼に見られることが明らかになった。今後、それらがそれぞれの地域でどのような契機によって変容したのかについての個別の研究の積み重ねが必要とされる。

さらに、言語表現に着目すると、喪葬儀礼では死者を死者の世界に送る(連れて行く)送魂の方向性(送魂ベクトル)を持つ歌と、それに抗して死者を引き留めようとする招魂の方向性を持つ歌(招魂ベクトル)が拮抗し、最終的に送魂ベクトルの力が上回って死者を死者の世界に移行させるという大きな歌の流れ(ストーリー)が明らかになった。

その際、呪的職能者(歌い手)は、死者の立場に立ったり、近親者の立場に立ったり、喪葬儀礼を主宰する呪的職能者自身の立場に立ったりして歌うが、そのありようは一通りではない。例えば、同じく死者の立場に立った場合でも、死者が死者の世界に行きたいと歌う民族もあれば、逆に行きたくないと歌う民族もある。前者は死者が独詠的に歌うものであり、朝鮮半島の挽歌(実際に棺を墓地まで担いでいく途中に歌う)で歌われ、死者は徐々に自分自身で死を納得して、仕方がないと諦めるようにストーリーが作られている。一方、後者は中国西南部に暮らすリス族のものだが、死者(の立場に立った呪的職能者)と、死者を死者の世界に行かせまいとする近親者(の立場に立った呪的職能者)の歌掛け(交互唱)によって歌われ、最終的に死者が死者の世界に近づいたところで、生者は諦め、こちらの世界に戻ってくる。

死者が送魂ベクトルと招魂ベクトルの拮抗を経て最終的に死者の世界に行くというストーリーは共通するものの、こうした違いを生むのは、その地域の歌文化のありようによっているだろう。朝鮮半島では歌掛けは、男女のものを含めてほとんど行われていない。一方、リス族は歌垣を初め、さまざまな場面で歌掛けをしている。古代中国の喪葬儀礼における歌がどのようなものであったかは、資料がなく不明としか言いようがないが、それがそれぞれの地域で、地域の歌文化とのありようによって変容していったということは考えられてよいだろう。

こうしたありかたをモデルとすれば、まず、古代日本には『魏志倭人伝』に記されたような日本独自の喪葬にかかわる歌があつたということから出発するのは間違っている。そうではなくて、『魏志倭人伝』が、倭人の襖を本土の「練衣」のようなものだと説明するように、基本的には古代中国の喪葬儀礼との影響を受け、それが日本地域の文化のなかで変容したものと捉えるところから出発すべきものと思われる。

となれば、5、6世紀ごろに中国から喪葬儀礼が入ってきた際に、それまでの喪葬歌が捨てられた、あるいは、それ以前に日本に喪葬歌はなかったという説は再考せざるを得なくなるだろう。

かなり早くから、中国の喪葬儀礼は周縁各地にさまざまな形で流入し、その地方の文化に沿って変容していった。それは、東アジアを覆うダイナミックな運動であり、その運動は実は火葬が取り入れられる現代の中国の葬儀にまで続く。そういうダイナミックで地域的な変容の一つとして、『魏志倭人伝』に記された「哭」や「歌舞」はあり、またその一つとして、『日本書紀』などに残された葬歌や、抒情的な悲歌や、『万葉集』に残された挽歌があるということだろう。

以上の成果は、個々の論文にも断片的に記されているが、まとめたものとしては、研究代表者（遠藤）による、リス族喪葬歌の資料と分析をまとめた『歌掛けのアジア 雲南省リス族の歌掛けと日本古代文学』として公刊した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 遠藤耕太郎	4. 巻 第71巻第2号
2. 論文標題 不尽の雪 赤人不尽山歌の「雪は降りける」をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 遠藤耕太郎	4. 巻 第61号
2. 論文標題 記載文学における異伝の源へ 人麻呂「泣血哀慟歌」第二歌群及び或本歌群をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古代文学	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 遠藤耕太郎	4. 巻 20
2. 論文標題 『万葉集』人麻呂歌集七夕歌の方法 文字による伝播と声の現在性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア民族文化研究	6. 最初と最後の頁 63~100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 遠藤耕太郎	4. 巻 19
2. 論文標題 リス（漢字）族（リス/Lisu）歌謡調査記録 資料1 温泉場での歌垣歌	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア民族文化研究	6. 最初と最後の頁 47~184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤耕太郎	4. 巻 第68巻12号
2. 論文標題 駆け落ちと歌垣 歌物語の抒情の起源へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 1~11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤耕太郎	4. 巻 18
2. 論文標題 「木氏歴代宗譜」とナシ(納西)族・モソ(摩梭)人の民間系譜	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア民族文化研究	6. 最初と最後の頁 77-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田美智江	4. 巻 18
2. 論文標題 古代中国の系譜意識と王権	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア民族文化研究	6. 最初と最後の頁 65 - 76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 遠藤耕太郎
2. 発表標題 不尽の雪 赤人不尽山歌の「雪は降りける」をめぐって
3. 学会等名 日本文学協会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 遠藤耕太郎
2. 発表標題 記載文学における異伝の源へ 人麻呂「泣血哀慟歌」第二本歌群及び或本歌群をめぐって
3. 学会等名 古代文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 遠藤耕太郎
2. 発表標題 白族白祭文与“万叶集”口承与記載
3. 学会等名 第三屆東亜民俗文化与民間文学論壇（雲南大学）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 遠藤耕太郎
2. 発表標題 『万葉集』人麻呂歌集「七夕歌」の方法
3. 学会等名 アジア民族文化学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 遠藤耕太郎
2. 発表標題 モソ人の抒情表現の技術と万葉和歌
3. 学会等名 比較民俗研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 遠藤耕太郎
2. 発表標題 映像で見る摩梭人 (Mosuo) の喪葬儀礼 古代中国と古代日本の喪葬儀礼を視野に入れて
3. 学会等名 アジア民族文化学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤耕太郎
2. 発表標題 「木氏歴代宗譜」とナシ (納西) 族・モソ (摩梭) 人の民間系譜
3. 学会等名 アジア民族文化学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 富田美智江
2. 発表標題 古代中国の系譜意識と王権
3. 学会等名 アジア民族文化学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 遠藤耕太郎 他16名 (山田直巳編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新典社	5. 総ページ数 541
3. 書名 歌・呪術・儀礼の東アジア	

1. 著者名 遠藤耕太郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 302
3. 書名 万葉集の起源 東アジアに息づく抒情の系譜	

1. 著者名 真下厚・遠藤耕太郎・波照間永吉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 【アジア遊学254】東アジアの歌と文字	

1. 著者名 遠藤耕太郎 他23名(吉田修作編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 (株)おうふう	5. 総ページ数 378
3. 書名 ことばの呪力 古代語から古代文学を読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	富田 美智江 (tomita michie) (40615952)	流通経済大学・法学部・准教授 (32102)	
研究分担者	岡部 隆志 (okabe takashi) (50279733)	共立女子短期大学・その他部局等・教授 (42674)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	張 正軍 (zhang zhengjun)		
研究協力者	工藤 隆 (kudo takashi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関